

V AAA 年次大会・ジャパン・セッション報告

AAA 年次大会におけるジャパン・セッション開催報告

久持英司
青山学院大学

2016 年 8 月 6 日（土）から 10 日（水）にかけて AAA (American Accounting Association: アメリカ会計学会) の 2016 年度年次大会がニューヨーク市のニューヨーク・ヒルトン・ミッドタウンおよびシェラトン・ニューヨーク・タイムズスクエアにて開催され、大会 4 日目の 9 日（火）、14:00 からのパネル・セッションの部において、国際会計研究学会主催・日本会計研究学会協賛により、The Voluntary Application of IFRS in Japan and Considerations for Future Mandatory Application（「日本における IFRS の任意適用と今後の課題」）と冠したジャパン・セッションが開催された。登壇者による報告、コメントおよびディスカッションの具体的な内容については次ページ以降をご覧いただきたいが、ここではジャパン・セッションの概要について簡単に報告する。なお、登壇者の所属等は当時のものである。

はじめにモデレーターの平松一夫氏（関西学院大学）により、日本における IFRS（International Financial Reporting Standards: 国際財務報告基準）の適用状況に関する説明がなされた。すなわち日本の上場企業にとって IFRS 適用は任意であり、適用企業

数は増加しているものの、依然として大半が日本の会計基準（Japanese GAAP）を適用していること、加えて日本の上場企業が選択できる会計基準には、日本基準、米国基準、IFRS、JMIS（Japan's Modified International Standards: 修正国際基準）の 4 つがあるとした。続いて、制度設計の関係者より 1 名（金融庁）、任意適用企業より 1 名、大学人より 2 名（教育面と研究面）、計 4 名の報告者を紹介した。

まず田原泰雅氏（金融庁）は Voluntary Adoption of IFRS in Japan（「日本における IFRS 任意適用」）と題して、IFRS を任意適用するに至るまでの日本の動きについて説明し、続いて金融庁の『IFRS 適用レポート』に基づいて任意適用企業の現状について述べた後、「『日本再興戦略』2016」が提起した会計基準に関する施策に今後も取り組んでいくとした。

次に蓮尾聡氏（マネックスグループ株式会社）は Changes of the Financial Reporting Process Following the Adoption of IFRS（「IFRS 適用による財務報告プロセスの変化について」）とした報告において、同社が IFRS を任意適用するまでの経緯、そして適用後に社内で生じた論点やメリットについて説明した。

橋本尚氏（青山学院大学）は **Current Situation and Issues Surrounding IFRS Education and Training in Japan**（「IFRS 教育・研修の現状と課題」）として、一般財団法人会計教育研修機構の IFRS 教育・研修委員会の報告書『IFRS 教育・研修のあり方に関する課題と今後の方向性』をもとに、日本が IFRS の任意適用をより円滑に拡大していくためには学生・公認会計士・各種利害関係者ともども IFRS について習熟している必要があることを強調し、そのための方策について論じた。

向伊知郎氏（愛知学院大学）は **Does IFRS Application Improve Information Comparability ?**（「IFRS 適用は財務情報の比較可能性を高めるか？」）において、IFRS を任

意適用した日本の上場企業と IFRS を強制適用しているフランス、ドイツおよびイギリスの同規模の上場企業とを比べたところ、IFRS の任意適用以降、日本企業の財務情報の比較可能性は向上したとする結果を示した。その一方で、日本企業における IFRS 適用企業と日本基準適用企業とを比較した場合には、IFRS 適用によって財務情報の比較可能性が向上したか否かは必ずしも明らかではないとも述べた。

以上の報告を受けて、ディスカッサントの山田辰己氏（前・IASB 委員／有限責任あずさ監査法人）から各報告者に対する質問とコメントが寄せられ、また同時にフロアと報告者との間でもディスカッションが行われた。